

青森県におけるヤリイカ漁獲物の 性比と外套長組成の年変化

伊藤欣吾（青森県水産総合研究センター）

キーワード：ヤリイカ・性比・外套長組成・水温

【目的】

ヤリイカは青森県沿岸漁業の重要な漁業資源となっている。青森県では、10～11月の太平洋側の未成年体分布密度をもとに日本海側の盛漁期である1～2月の漁獲量を予測し一定の成果が得られている。量的な予測は可能になったものの、漁業者からは雌が多いとか、小型であるとか質的に年変化が見られることが指摘されていた。そこで、青森県日本海側のヤリイカ盛漁期に漁獲されたヤリイカの生物測定を行い、性比と外套長組成を調べ、年変化が生じているのか、またその要因について検討した。

【材料と方法】

青森県日本海側に位置する大戸瀬漁業協同組合に水揚げされたヤリイカについて、1998～2004年の7年間、12月～翌年4月までの各月1回、各銘柄70個体を目途に生物測定を行った。測定項目は外套長、体重、外套膜肉重量、雌雄、成熟度、生殖腺重量とした。雄については、生殖腺を精巣、貯精嚢および精莖嚢に分けて重量を測定し、成熟度の判定は精莖嚢に精莖が入っていれば成熟、入っていなければ未熟とした。雌については、てん卵腺の重量および生殖腺を卵巣、輸卵管および輸卵管腺に分けて重量を測定し、成熟度の判定は輸卵管に卵が入っていれば成熟、入っていなければ未熟とした。月別銘柄別に抽出された標本をもとに、その月の漁獲量全体に引伸ばし、月別の漁獲個体数、雌雄比、平均体重、平均外套長、成熟割合を推定し、その年変化を明らかにした。さらに、年変化の要因について、生育海域の水温、他の海域の銘柄組成から検討した。

【結果と考察】

青森県日本海側で12月～翌年4月に漁獲されるヤリイカはほとんどが成熟個体で、その性比の年変化は小さかった。しかし、外套長の年変化は大きく、2001年漁期は雌雄ともに有意に小さく、それは雄の方で顕著であった。

雄の外套長は生育海域の積算水温と正の相関関係がみられたが、2001年漁期だけはその関係から大きくはずれた。ただし、漁獲加入前の10月下旬に青森県太平洋沖で採集した未成年体の外套長は2001年漁期も含めて生育海域の積算水温と正の相関関係にあった。これらのことは10月下旬から盛漁期1月までの間に成長を抑制する水温以外の要因が働いた可能性が考えられるが、今のところその要因は見当がつかない。もう一つ考えられる要因として、大型の個体が間引きされた可能性が考えられる。ヤリイカは青森県の太平洋側から日本海側へ産卵回遊するが、2001年漁期の外套長サイズは太平洋漁場の沖合底びき網漁業では小型ではなかったものの、津軽海峡漁場では小型であった。また、青森県太平洋北部の釣漁場では2001年漁期の漁獲量が他の海域に比べて好調であった。これらのことから、青森県太平洋北部の釣漁場で大型個体が間引きされたために、その下流に位置する津軽海峡や日本海側の漁場が小型であった可能性が考えられた。

今回得られた外套長と積算水温の関係式は、漁況予測を行う上で十分役立つと考えられた。しかし、例外の年の要因を明らかにする必要がある。